

鎮座100年を迎えた明治神宮を さらに100年支えていくための課題

東海大学観光学部教授 田中 伸彦

1 はじめに

明治神宮は1920（大正9）年に創建された。そして、2020（令和2）年に鎮座100年を迎えた。これを記念して、神宮内苑では20年秋に開催された「明治神宮鎮座百年大祭」をはじめ、数年間にわたり御社殿の屋根修復工事や明治神宮ミュージアムの設立など、各種の鎮座100年記念事業が行われた。その締めくくりとして、JR原宿駅近くの「第一鳥居（南参道鳥居）」が創建以降初めて建て替えられ、22年7月4日にお披露目された（写真1）。



写真1 リニューアルされた明治神宮第一鳥居（南参道鳥居）
＝写真はいずれも筆者撮影

また、20年といえば、ちょうど東京オリンピック・パラリンピックが開催される年と重なっていた。そのメインスタジアムは、神宮外苑の北西に隣接している国立競技場であった。現在の国立競技場は国の所有で、独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）が管理・運営をしているが、その起源は1924（大正13）年に完成した明治神宮外苑競技場である。つまり、元々は神宮外苑の一施設として建設された施設であった。その後、国へ譲渡され、建て替えられた国立競技場は、景観問題など物議を醸しながら、建築家・隈研吾氏の設計で多くの国産木材を使用した新スタジアムに生まれ変わり、2019年11月30日に竣工した。この国立競技場を含む神宮外苑周辺地区は、東京オリンピック・パラリンピックの「ヘリテッジゾーン」として、通称「東京ベイゾーン」の有明やお台場などの湾岸エリアとともに重要な空間として位置づけられ、都市計画が見直されていった。

このように現在、明治神宮は内苑・外苑ともに押しも押されもせぬ都心の貴重な“みどりの空間”として位置づけられ、国内外の多くの人びとから親しまれ、利用されてきた。衛星画像などで確認するとよくわかるのだが、現在、都心のみどりはさほど多く感じられない。その中でも皇居から迎賓館、新宿御苑、明治神宮内苑・外苑、代々木公園にと繋がる一帯にはみどりの塊が残されていて、貴重なグリーンベルトを形成している。

明治神宮には、COVID-19（新型コロナウイルス）による外出制限が始まるまでは、年間1000万人以上の参拝者が来訪していた。都内でも年間1000万人が訪れる場所は限られる。COVID-19が収まれば、再び明治神宮に活況が戻ってくることは想像に難くない。また、米国のオンライン旅行会社であるトリップアドバイザーが公表している22年の「人気のある東京都の観光スポット」ランキングにおいて、明治神宮は第1位に輝いている¹⁾。つまり、日本国内に留まらず、COVID-19収束後には世界中から明治神宮をめざして多くの来訪者が再び押し寄せることが予想される。

明治神宮とは、大正時代の人びとが、去り行く明治時代に思いを馳せ、明治の“レガシー”を残すべく造った空間である。今では東京のみどりのオープンスペースとしてすっかり定着しているため、参拝や観光に訪れる人びとの中には、明治神宮の内苑・外苑が太古の昔からあったと考えている人も少なくない。しかし、実はそうではない。110年前、この地は広大な荒地であっ

た。明治時代には元々、神宮内苑の敷地は南豊島御料地、外苑の敷地は青山練兵場であった。両方とも神宮造成前は荒れ野のような光景が広がっていたそうである。その荒地に、和風で日本の近世までの伝統を象徴する神宮内苑と、洋風で日本の近代以降を象徴する神宮外苑が造られたのである。

2 神宮内苑と神宮外苑を管理するための基本コンセプトのありか

100 年前に計画され、造営された明治神宮内苑・外苑が今なお、多くの人びとを惹きつけてやまない理由は、造営時に掲げられた計画的かつ明快なコンセプトが守られてきた事実によるところが大きい。

表 1 は、筆者が『森林環境 2016』²⁾ で示した表を改編したものである。江戸時代まで続いた武家による統治から、近代国家に生まれ変わった「明治時代のレガシー」を未来に継承するため、大正時代の人びとは、東京に「和」と「洋」の二つの顔を持つツインパークを仕立てることに思い至った。その主要コンセプトは表 1 のとおりで、内苑は「神苑と林泉を調和させた造園」として、外苑は「明快にして、快適な散策園ないしは記念園」として、当時の第一線の森林科学者や造園学者によって具現化されていった。また、内苑は国費を使った国家プロジェクトであり、外苑は徳川家達公爵が会長を務めた明治神宮奉賛会という民間の手で進められたプロジェクトであったことも

表 1 明治神宮造営の主要コンセプト

和・伝統の「内苑」、洋・現代の外苑

内苑：古式様式による伝統美の庭園と森

「神苑と林泉を調和させた造園」

献木と人の手でつくられた森（常緑広葉樹林）

外苑：現代式庭園

「明快にして、快適な散策園ないしは記念園」

ビスタ景観（絵画館銀杏並木）・プールパール

厳かな風致の形成閑静な環境下における競技場の導入

（田中〈2016〉を一部改編）

（参考：内山・蓑茂〈1981〉）³⁾

対比的である。さらに、明治神宮の造営にあたっては全国から約10万本の木々が献木されたとともに、労働力として日本各地から多くの人びとがボランティアとして参画したため、まさに名実ともに“国民を挙げて”造られたといえる苑地であることも特徴的である。

さて、このような明治神宮を未来に継承するためには、原点となる基本コンセプトに忠実であるべきことを忘れてはならない。このことは、1955年に開園して商業的成功を収め続けているディズニーランド（米国）が、迷った時にはウォルト・ディズニーの基本コンセプトに立ち返って思案することを“是”としている仕組みと何ら変わりはない。

では、明治神宮が立ち返るべき基本コンセプトとは何だろうか。答えとしては、内苑の場合には「明治神宮御境内林苑計画（林苑計画書）」であり、外苑の場合には明治神宮奉賛会が起草した「外苑将来の希望」であろうと筆者は考える。かみ砕いていえば、「外苑は民間（奉賛会）の手でしっかり目的を持って造った。それを国に寄進するのであるから、後世の人もその方針に従ってほしい。神宮にそぐわない建物は今後建ててほしくないし、苑内では閑静な風致を維持するため、イベントさえ開催してほしくない」という希望である。この大正の人びとが現代の日本に向けて熱い気持ちでとりまとめたコンセプトがあつてこそ、明治神宮はこれまでぶれることなく良好な環境のまま、魅力的な空間が維持されてきたのである。

ただし、それぞれの基本コンセプトは100年前に示されたものである。そのため、都市化の進展や気候変動、経済状況の変化や科学技術の発展などに伴って事情が変化した部分も見られる。明治神宮を今後100年に向けて支えていくためには、基本コンセプトを忠実に理解しつつ、現代に生きる我々の社会が受け止め、発展させていくことが肝要となる。

現在の明治神宮を取り巻く課題には、どのようなものがあるのだろうか。本稿では、以下に内苑・外苑の主要テーマを取り上げて、簡潔に考察したい。

3 神宮内苑の課題——ナラ枯れ

神宮内苑においては、通称「ナラ枯れ」と呼ばれる森林の病害虫が喫緊の課題として挙げられよう。国立研究開発法人森林研究・整備機構 森林総

合研究所によると⁴⁾、ナラ枯れは糸状菌（カビの仲間）の一種、「*Raffaelea quercivora*」という病原菌による伝染病で、「カシノナガキクイムシ」と呼ばれる甲虫が、この病原菌を木から木へ運んで蔓延する。この病原菌により、ナラやカシ、シイなどの樹木の道管の樹液流が停止し、「水切れ」を起こして枯死に至る。

もともとナラ枯れは 2000 年代初頭ごろより雪深い日本海側の地域で目立ち始め、当初は乾燥した太平洋側にまで広く蔓延しないのではないかと考えられていた。しかし、その予想は裏切られ、東京都心にある明治神宮でもナラ枯れ対策は一刻を争う課題となっている。明治神宮内苑を参詣するとわかるが、苑内の大木の一部に白く細長いプラスチックでできた通称「カシナガトラップ」と呼ばれるカシノナガキクイムシの大量捕獲装置が取り付けられていることに気づく（写真 2）。実は、人の手で植えられた明治神宮内苑の森ではうまく後継の稚樹が育っていない状況にあるため、上層の大木がナラ枯れで枯死してしまうと、荘厳な森の景観が維持できなくなる可能性がある。これは「林苑計画書」を執筆した先人も予測していなかった事態であろう。



写真 2 神宮内苑に設置されたカシナガトラップ

今のところ、「ナラ枯れ」については対症療法的な対策が中心で、根本的な解決方法が見いだされていない。そのため現在、我々はなるべく林苑の巨樹を枯らさないための手当てを進めながら森林の状態をモニタリングし、根

本的な解決方法の出現を待つとともに、苑内の後継稚樹の育成に尽力する必要がある。

4 神宮外苑の課題——神宮外苑再編計画

神宮外苑においては、「神宮外苑再編計画」と呼ばれる都市計画の見直しが目下、大きく注目されている。この再編計画は、本稿を執筆している22年12月においてもまだ進行中の案件であるため、どのような決着を見るかは筆者にもわからない。そのため、ここでは執筆時点までに進行した再編計画の推移を客観的にとりまとめておきたい。

東京都都市整備局が公表した資料⁵⁾によると、神宮外苑は、施設の移転や高層ビルの新築を経て図1のとおり再編される計画が示されている。現在の神宮外苑と大きく異なる点は、秩父宮ラグビー場と明治神宮野球場との場所の交換、事務所棟や複合棟などの高層建築物の建設（都市計画公園指定の一部解除）、会員制テニスコートの中央芝生広場への移転、整備に伴う樹木の伐採などが挙げられる。



図1 神宮外苑地区のまちづくりの公開イメージ図
 (出典：東京都都市整備局「神宮外苑地区のまちづくり」)

ちなみに、この神宮外苑地区におけるまちづくりは、三井不動産と宗教法人明治神宮、独立行政法人日本スポーツ振興センター、伊藤忠商事が議論を重ねて 20 年 2 月に東京都公園まちづくり制度実施要綱に基づいて提案書を提出。21 年 7 月の同制度の適用許可を経て同 14 日に都市計画提案をし、22 年 3 月 10 日に東京都より都市計画決定の告示がなされている。

一般の方々は、神宮外苑は、税金で運営されていると思っているかもしれないが、実際は違う。明治神宮の“自助努力”、つまり、お賽銭やお守りなどで納められたお金のほか、神宮球場や明治記念館（結婚式披露宴ほか）などの経営で得られる収入で維持管理されてきたのが実情である。本来であれば、神宮外苑の銀杏並木の景観などは、国指定の文化財（名勝）などに指定して、国の責任で維持管理されてもおかしくない“国の宝”である。しかし、明治神宮へ向けられる厚い信頼のもと、その文化財指定の動きが具現化しないまま今に至っているのが現状である。

新型コロナでスポーツイベントが軒並み中止になり、披露宴やパーティーなどの会合が著しく控えられている昨今、明治神宮のみどりやオープンスペースを維持することが困難になりつつあることは想像に難くない。神宮外苑は、大きな難局を迎えているのである。

さて、22 年 3 月 10 日に東京都より都市計画決定の告示がなされた後、市民の間から計画を見直すための意見が次々と表明され、署名運動がおこった。直近では 22 年 12 月 16 日に一般社団法人日本イコモス国内委員会から「緊急調査報告『神宮外苑いちょう並木』」が公表され、同 20 日には「神宮外苑の自然と歴史・文化を守る国会議員連盟」などが参加した緊急集会が開催されるまでに至っている。

上記の動きから、23 年も各種の展開が予測される。本稿は、締め切りの都合で、この課題がどのように決着するかまで伝えることができない。本稿で主張できることは、神宮外苑の計画を推進する主体も、計画に対して懸念を表明する主体も、どちらも明治神宮の未来を真剣に考えている人々によって構成されている事実を忘れてほしくないことである。対立は良好な解決を生み難くする。このような時こそ、どちらの主体も明治神宮奉賛会が起草した「外苑将来の希望」の趣旨に立ち返り、100 年後の神宮外苑のあり方を考えるべきであろう。

5 おわりに 明治神宮の今後 100 年を見据えて

以上、創建 100 年を迎えた明治神宮の管理運営のあり方について、いくつかの考察を進めてきた。そして明治神宮では、100 年前の創建当時には予測ができなかったような事象が複数発生していることが明らかとなり、今を生きている我々が「大正時代の人びとが考えた明治時代のレガシー」を継承しながら、現在の自然環境や社会情勢を取り込みながら、的確に舵取りしていく必要があることを指摘できた。

なお、今回^{そじょう}上に載せなかった課題としては、1964（昭和 39）年の東京オリンピックの際に廃止されてしまった裏参道（明治神宮内外苑連絡道路）の復活や、明治神宮の敷地内で発生するバイオマスなどを再生可能エネルギーとして活用するといったエネルギーの課題、急速なキャッシュレス化や外国人来訪者の増加に伴う通貨の多様性に対応すべき経済的な課題などが挙げられる。今後 100 年明治神宮を支えていくために、令和に生きる我々が考えるべきことは山積している。

人の手で造られ、自律的な運営を続けることに成功し、時代を超えて魅力的であり続けている都市のみどりのトップランナーである明治神宮に対する期待は大きい。そのような明治神宮に対しては、対立を超えた超然的な連携のもとで、多くの課題を解決していく姿勢が望まれる。

〔引用文献・注〕

- 1) Tripadvisor 社 東京都観光ホームページ https://www.tripadvisor.jp/Attractions-g1023181-Activities-Tokyo_Prefecture_Kanto.html（2022 年 12 月 24 日最終閲覧）
- 2) 田中伸彦（2016）明治神宮のレガシーと東京オリンピック・パラリンピック，森林環境 2016，公益財団法人 森林文化協会発行，131-141
- 3) 内山正雄・養茂寿太郎（1981）代々木の森，郷学舎，118pp
- 4) 独立行政法人森林総合研究所（2011）ナラ枯れに立ち向かう，独立行政法人森林総合研究所発行，11pp
- 5) 東京都都市整備局 「神宮外苑地区のまちづくり」https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/bosai/toshi_saisei/saisei07.htm（2022 年 12 月 24 日最終閲覧）